

DRAWING FLASHBACK BY FLASHBACK

小杉美穂子

Kosugi Mizuko

安藤泰彦

Ando Yasuhiko

昼過ぎに起き出し、TVのスイッチを入れる。白バイに先導されたランナーの姿を消した画面に見ながら、この文章を書き出す。一九九一年、元旦。

一九九〇年がどんな年であったのかは、昨日のTVが、一日中報じ続けていた。画面に次々と映し出されるニュース群は、カタログ販売の商品よろしく、何処からか沸いてくるニュース性の値段、ゼロのつきかたの違いしか見えず、平坦に流れ去っていく。解説者が顔をひきつらせたり、ビデオテープ自体が身を振って画像を荒らすことなど決して起こりはない。画像に向かう方も、カタログを手にするように、買う気もなく眺めやり、そして結局は何かを買ってしまうのだ。

これが、欲しいものだ、これが一九九〇年だったと頷きつつ…。

一九九〇年元旦、私達は福岡にいた。ギャラリー・アルティウムへの作品「FLASHBACK」の搬入のため、ペンキと糊に汚れた姿で、ホテルのフロント係から胡散臭げに、キーを手渡されていた。

そして一九九一年、元旦の今日、私達は、東京での「Project FLASHBACK 1991」の為の準備に追われている。

「FLASHBACK」は、一九九一年一月に福岡を出発し、三月の京都を経て、一九九一年一月、東京で「FLASHBACK III, IV」が発表される。

一九九〇年は、私達にとって「FLASHBACK」の発表と準備の一年だった。その中で、私達なりの一九九〇年という画面の中から、いくつか目にとまった映像を拾い集めてみたいと思う。拾い集めた映像を右目で、ニュースの流れを左目で合わせ見る時、ひよっとすると、一九九〇年という一年の、私達自身もそ

の中に織り込まれたビデオテープ自身の歪みや、空白が垣間見えるかもしれない。もちろん私達の脳波が受けとめえる容量の限りにおいて、大層微小なものであるしかないが、何かを作る動きの中で、私達はもともと時代と向かい合ったのではないかと思う。たぶん、実際に作品を作る少し以前の交渉、企画者との、協力者との、或いは企業に対しての動きかけの中で、幾つかの映像を拾い集めることができるだろう。揺らぎのない平坦な画面の内に、微かな偏光が見えることを期待して…。

——「FLASHBACK」の北上、或いは、流通経済の中の鬼つき——

「FLASHBACK I」（一九九〇・一・三・オープン）は、福岡のギャラリー・アルティウムの企画で、一九八九年夏、プランニングが開始された。プランニングの途中、京都の四条ギャラリーから、三月開催の企画展の依頼を受け、連続した期間で次の「FLASHBACK II」を発表することになった。ここから「FLASHBACK」の北上計画が始まったとも言える。経済的、時間的条件から、年一回の発表が精一杯であり、なおかつ次の新しい作品をせっかちに前に進み続けたい私達が、あえて同じ作品の連続発表を選んだのには、幾つかの理由があった。

ひとつは、開催期間の問題。

作品を見て戴いた方には、お解りいただけると思うが、私達の作品は、内部を

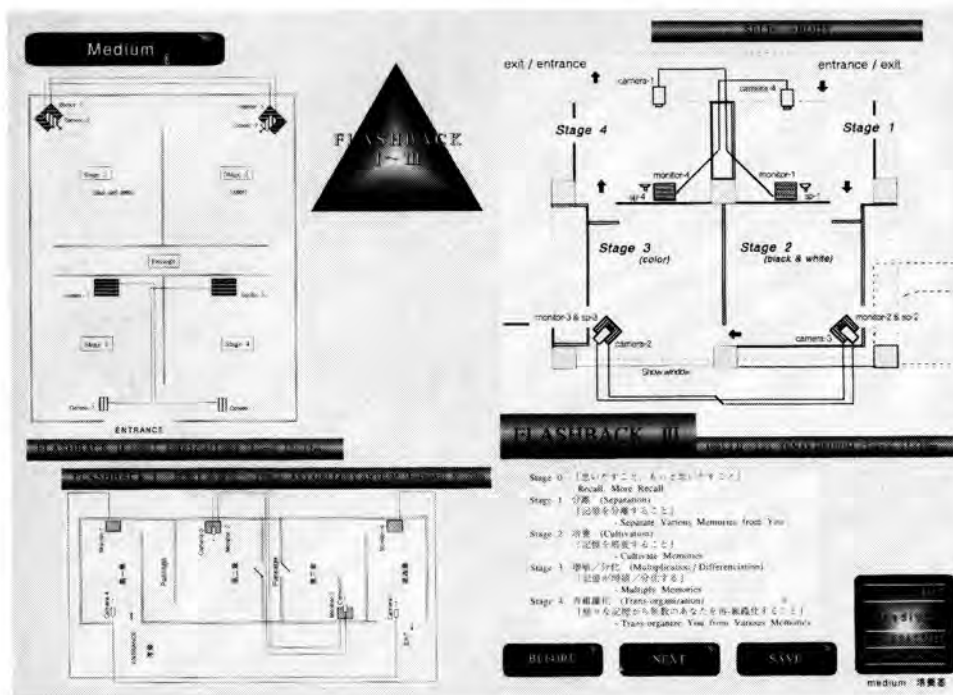
歩く観客の動きを導線とする空間作りであり、一種の迷路、ジオラマに近い構造物である。作品設置はギャラリーの空間内に仕切り壁を組み立てることから始まり、次第に空間全体を作り変えていくというものであり、広いギャラリーでのプランでは、五、六人がかりで最低二日は、かかってしまう。広い空間がある期間であれば一ヶ月間は、作品の展示に使用したいというのが、「FLASHBACK」以前の私達の願だった。(作品「芳」にて十日間、作品「NINE ROOMS」にて二十日間の命だった。)

アルティウム同様、四条ギャラリーでも展示期間が一ヶ月であったこと、又、関西で私達の作品を見続けてくれる人がいることも、同作品を三月にも発表したいという思いにつながった。そして、もう一点、京都市の企画ということでも多少なりとも費用が出るということであった。全く費用が出ないということであれば引き受けるかどうか、悩んだ事と思う。私達の作品はかなりの金食い虫であり、一九八九年あたりで、経済的には限界にきており、発表の回数を減らす事も考えねばならない状態だった。他の美術作品と違い、作品「物」として流通経済に乗らない以上、従来通り自費でギャラリーを借り、制作、発表し続けることには限界があった。企画として、制作費を出してもらおうと、そしてそればかりではなく、従来の「美術作品物」としての流通形態とは違った形を模索することなしには、芸術という品のいいカルト、或いは、芸術に身を賭すという、こころよ年余りの、実のところは決して美しくはない美の物語に飲み込まれてしまっしかな、と思いついてきた。額の多少に拘わらず、企画としての展覧会で、私達のような作品に制作費が出るということが、四条ギャラリーでの展覧会を決心させたと言える。

これは、私達だけがぶつかっている問題ではなく、他のインスタレーションで、「もの」としての作品を作らない作家達にとっても同様であり、特に、大がかりな作品を作る者達の経済的な負担は大変なものである。

「作品」ものからそれらの作品は既に変質を遂げ、ある時空間を巡る一つの、或いは、幾層にも入り組んだ情報に近くなっている。情報としての作品群；それらには従来とは違った経済/フィールドを作ってやらねばならない。

一九九〇年、たぶん容器(うつわ)として、これら作品群を展示できる、ある広さを持った空間は多く生み出されてきている。地方の美術館の設立が進み、企業の新しいビルディングが建つ度、新しいギャラリーや多目的空間が生まれている。しかし、企画として美術館が用意できる費用は、「作品」ものの経済の頃と変わらず、費用の多くは、収蔵品美術のためのものようだ。また、企業ビルの内に作られた空間では、特別のキヌレターを置かず、広生代理店にイベントの



一つとして、美術展も任せる場合も見られてきた。その場合、費用は公営機関よりは出るが、イベントの中では低い額である。展示後、作家が作品を売る、物としての作品の流通が、次の段階に来ることを見越しての美術展なのだから。TVの画面からは、美術作品の高騰が流れ、又、現代美術の作品群を公営や企業ビル内に見ることも多くなったが、「作品」ものとしての形態は、ここ数年逆に強くなってきているように思われる。

映像・音・オブジェ等、制作に向かう若い人達には、これら今までは離れていた表現形態を一つにまとめた作品として統合していきたいという思いがあるように思う。今、私達を取り囲む現代の環境は複雑にこれらが絡み合い、美術以外の色々な場面では、異分野間のアクセスが芽生え始めている。しかし、この様な状況のなかで、一つの分野で収まらぬ作品を作りたいと思うとき、私達や他のインスターションの作家達同様、彼等も、「作品」もの「流通の壁」にぶつからざるを得ない。骨身を削り、展覧会の後には何も残らない。何も残らなければいいほうで、借金が残る。それを何年も続け得る作家達がいるだろうか？

しかし、このような袋小路の中で考えねばならないこと、その一つに企業のサポートがある。私達は、「FLASHBACK」の機材借用によって始めて、幾つかの企業のサポートをとった。まだ企業側には、貧しい芸術家に同情して貸し出すという面も残るが、交渉に応じてくれた人の中には、空間・映像・音・身体など、複数の媒体（メディア）の関わり方の可能性に興味をもって協力してくれた人もいた。そこには、文化支援という消極的な関係とは違った、互いのフィールドを越えた関わり可能性もあるのかもしれない。企業との関わりについては、クリストのように、単に一つのスタイルとして企業のサポートを拒否することで、作家の自由を確保するなど嘯きつつ、自筆サイン入りのドロイングを「作品」ものとして流通経済にのせる、あまりにも作家らしい作家とは違った道を私達は探し、進みたいと思うのだ。その意味で、今回の「FLASHBACK III, IV」で試みている映像や音関係等の五人のスタッフ達（さらには企画者）とのコラボレーションは、異種のフィールドとの関わりを広げていく一つのきっかけとして大きな意味を持つように思われる。

以上、一九九〇年、「FLASHBACK」の制作準備へのフラッシュバックであるが、これらの問題は、きっと何人かの作家達が集まれば出る話題の一つでもあるだろう。しかし、あえて活字化し公にすることが、今は必要に思われる。思われた一九九一年、元月。

